

## 進み始めた博物館拠点施設と資料活用事業

事務局



県立静岡南高校の校舎



県立静岡南高校の図書室

昨年度の2月県議会で川勝知事が表明された、高校再編により平成25年度以降利用が可能となる県立静岡南高校の校舎の一部を新たな活動拠点として整備することについて、来年度の予算に拠点施設整備の改修設計費が計上されました。設計費がつくと言うことは、その後の改修費も予算化される公算が強く、やっと「自然史資料を活用するための拠点整備」が具体化することになりました。

さらに、来年度の取組としては、拠点整備のための改修設計の他に博物館機能充実の検討があげられています。今後、静岡県の博物館構想において、さらに検討会を開催し、専門家や行政の方などを含めて、将来設置する博物館の内容や、どのような組織で、どのような運営をするかなどを1年間かけて検討されるものと思われます。我々NPOもそれに対して最大限協力して、よりよい博物館をめざすべく意見を言っていくつもりです。

現在、当NPOが県より受託して実施している自然史資料の整理・保存事業は、来年度も引き続き実施が予定されており、静岡南高校の校舎への移転に伴い、保存・整理を推進強化することとなっています。

また、平成22年度と23年度の2年間にわたって、緊急雇用事業を活用して実施してきた「自然史資料の活用事業」は、ミニ博物館や出前博物館を各地で数多く実施したことにより、毎年20万人を越す展示観覧者がありました。この

ことは、県庁内でも大きく評価されており、今回の整備予算にも反映されているようで、多くの県民に収集された自然史資料と自然史博物館のことをもっと理解してもらうためにも、この事業を来年度も継続する可能性が高くなっています。

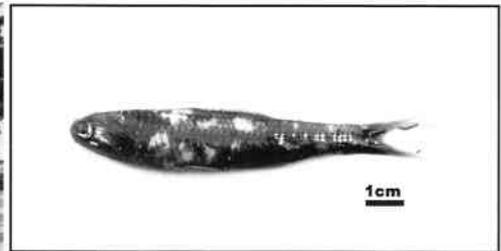
例えば今年度は、この「自然史しずおか」でも何回か報告していますが、清水区辻の「自然学習資料センター」での常設展や特別展「世界のアゲハチョウ」をはじめ、静岡市立日本平動物園、富士山こどもの国、県立中央図書館、静岡科学館る・く・る、県立浜北森林公園、御殿場樹空の森など、7か所で9回ものミニ博物館を実施するとともに、ふじさんメッセ、浜松科学館、吉田町ちいさな理科館などで、子供達への体験実習を含めた出前博物館を7回実施しています。

このような事業も今年度まで当NPOが受託して実施してきたのですが、展示内容に関しては、緊急雇用での採用の人員を活用するとはいえ、企画やパネルの内容、展示会への輸送などは、当NPOの人材の中で検討し実施するほかなく、少ない人数では結構負担が大きく大変です。しかしながら、これらの資料活用の事業が、今後の博物館の整備に向けて重要な施策となりそうですので、もう少し頑張る必要があります。ボランティアで協力してくださる方がいれば、大歓迎です。よろしく願いいたします。

自然観察会報告  
三保海岸ビーチコーミング  
石川章子



真崎灯台前でビーチコーミング



打ち上げられたハダカイワシの仲間



打ち上げられたハコフグ成体

1月20日（日）三保真崎海岸でビーチコーミングを行いました。心配していた前日の雨も上がり、大潮の干潮という好条件に恵まれました。

深海魚は久保田正先生、魚類は板井隆彦先生、大貫清貴先生、地形は柴正博先生、漂着物は清邦彦先生、参加者もそれぞれ、甲殻類や深海魚、漂着物、貝、生物など興味の幅が広く、様々な方向から海について学べる機会になりました。

私は貝類に注目して歩きました。数日前天気が荒れたので、海を漂う浮遊性の貝類が流れ着いていないかなと思っていました。目的のカメガイは大きさが5ミリ程しかなく、透明で薄く繊細なため、すぐに壊れてしまいます。運よくヒラカメガイを見つけることができ、同じ浮遊性のクリイロカメガイ、ウキヅツガイも拾いました。他にもムギガイ、タカラガイ、キンチャクガイ、ナツメガイなどを拾い、貝類も多様性に富んでいると実感しました。

魚類ではハコフグの幼体と成体が共に打ち上げられていました。深海魚のハダカイワシの仲間も見つかりました。大貫先生がお持ちくださったシギウナギなどの深海に棲む生物の標本を解説してくださり、普段見る機会がない変わった形の深海魚も、この海に棲んでいるんだと思うと、少し身近に思えて

きました。

真崎灯台を越えて歩いていくと浜の様子が変わり、流木が目立つようになりました。小枝を掃うとハマトビムシが飛び跳ねます。ハマトビムシは昆虫ではなくヨコエビという甲殻類なのだと知りました。姿を観察したかったのですが、すぐに砂にもぐってしまうので見られませんでした。

生物だけでなく、ハサミや部分入れ歯などの人工物もたくさん落ちていました。久保田先生に見せていただいた、何でも口にしてしまうミズウオの写真と合わせて、人間の生活が生物や環境に及ぼす影響の重大さについても考えさせられました。

最後にみんなで集めたものを見せあい、それぞれの専門の先生方に同定していただきました。拾った物それぞれに参加者の個性が見られて、楽しい時間でした。

去年は3月末の開催でしたが、今回は1月でとても寒かったです。ですが、夢中で拾っている間は寒さを忘れていました。時期が違うからか、昨年とは目につく物も少し違いました。昨年たくさん拾ったナミマガシフはあまり見られませんでした。季節が変わったら、また別の面白い発見があるかもしれないです。浜を歩いて、深海魚から海面に浮かぶ貝にまで出会えた、興味深い観察会でした。

## 横須賀市自然・人文博物館の見学報告

水野米利子



液浸標本室で荻原学芸員の説明を聞く



天井に吊り下げられた剥製標本

2月26日(日)、横須賀市自然・人文博物館へ見学に行きました。当日は我がNPO団体理事長の天岸氏を始め静岡県自然史博物館ネットワークの会員8名が参加しました。博物館では地質担当の柴田学芸員が館内の説明、案内をして下さいました。

横須賀市自然・人文博物館では計8名の学芸員が分野ごとにあり、自然系では植物・動物・地質・昆虫に一人ずつ、人文系には考古学・歴史・民族・近代建築に一人ずついるとの事です。そのほかにも常勤の職員が4人と非常勤職員、アルバイトが数名いるそうで、こちらの博物館は市が直接管理、運営しているため、学芸員以外の職員は市役所から派遣されるているようです。また、博物館に直接的なボランティアはあらず各学芸員が年間で20日アルバイトを雇える仕組みになっていました。

二階入り口で博物館の歴史や内部構成を説明して頂いた後、博物館の裏を見せていただきました。今回見学させていただいた部屋は8つで、液浸標本室、化石・鉱物標本室、哺乳類剥製・昆虫標本・植物標本と一緒に保管されている剥製標本室、暗室、主に魚等の標本を洗うためのシャワー室、ビデオ室、図書室、学芸員室と外から来た方が標本を見るための研究室を見せて頂きました。

液浸標本室では海洋生物系学芸員の荻原学芸員にご説明頂きました。標本は塩化ビニール容器に保存していると2～30年で、容器が変色してしまうので実際はガラス容器に入れたほうが良いのですが、三浦半島は地震が心配され

る地域なので、その観点から現在はほとんど塩化ビニールでの保存にしているそうです。魚以外の動植物標本は、エアコンで一年中温度が一定に保たれた剥製室で保管されており、部屋いっぱい、天井にまで吊り下げられた標本が印象的でした。また標本室はどれも歩くスペースの確保も難しい程標本でいっぱい、特に化石・鉱物標本室では、部屋に入りきらない未登録の標本が廊下に並べられており、他の博物館に共通するものがありました。

もうひとつ印象に残ったのは横須賀市自然・人文博物館では運ばれた動物の解剖はもちろん剥製・骨格標本は行わずすべて委託で行っていて、剥製標本は年1体しか制作できない事です。駿河ほねほね団として活動する私にとってはほねほね団の活動も重要な役割があると実感しました。また、図書は人文で貴重な資料を別に保管している以外、3つの部屋にすべての分野が一緒に置かれており、週一回アルバイトの方が整理している以外本の登録等はしていないため、一般公開はまだできないとのことでした。

今回の見学で、実際に博物館を運営するにあたって、市営での運営か委託事業での運営双方の利点や欠点をいままで以上に考えさせられる体験となりました。また、こうして博物館見学を重ねてゆくうちに、表向きだけではわからない各博物館の運営方法についての利点と弱点が見えるようになり、これら経験が静岡県の博物館を設立するにあたり役立つ要素になるとよいと思いました。

## 静岡県の外来生物

### ハリネズミ

三宅 隆



マンシュウハリネズミ

静岡県内では、伊東市でマンシュウハリネズミが確認されています。元々はペットとして飼われていたものが、遺棄されたり逃げられたりしたものが増えたものと思われます。

伊豆シャボテン公園にハリネズミが保護され始めたのが1995年ころからで、2003年までに約130頭が保護されていました。最初は伊豆高原の大室山やその周辺の別荘地帯からだったのですが、その後持ち込まれる範囲は広がり、現在は伊東市内全域に広がってきており、市外へ広がっている可能性もあります。

ハリネズミは食虫目ハリネズミ科の動物です。頭胴長20～30センチメートル位、尾長2～3センチメートル位、体重700～800グラム位です。顔面と腹部を除いて全身に毛が変化した針の棘で覆われています。敵に襲れたり、危険を感じると、体をボールのように丸くして身を守ります。主に夜行性で昼間は雑木林や藪などで、岩や倒木の下の窪みや落ち葉の下にもぐったりして寝ています。日没後に藪などから出てきて、主にミミズや昆虫、果実、卵などを食べます。12月ころから3月ころまでの期間は冬眠します。

2007年度、静岡県より、外来生物の調査を依頼され、伊東市内においてハリネズミの調査を実施しました。大室山周辺で、ネズミ取り用のワナをかけたのですが、思うように効果があがりません。そこで、夜間、公園を懐中電灯で照らしながら探し回ったところ、あちこちで見つ



丸まったハリネズミ

けられるようになりました。そこで、夜間、ゴルフ場に許可を得てコースを回りながら調査したところ、一晩で20頭も目撃することができました。懐中電灯に照らされると、さっと丸くなって動かなくなります。針の棘で身をまもっているのですが、キツネやタヌキならば、噛みつかれなく効果はあるのですが、人間は、皮手袋を使えばいとも簡単に捕まえてしまいます。まさか、人が敵になるとはハリネズミも思っていなかったのでしょうか。

この調査の結果、現在では、伊豆高原周辺から、海岸地帯や伊東市の南側にまでこの10年間で大きく分布が広がっていることが確認されました。

現在、目立った農作物への被害はあまり確認されていませんが、生態的には、モグラとの競合や地上性野鳥の巣への被害などが考えられています。今後、どんな問題が起きるか、また何が起こるか判らないので、今のうちに芽を摘んでおく必要があります。

マンシュウハリネズミは特定外来種に指定されているため、捕まえることはもちろん、許可なく家に持ち帰って飼うことも禁止されています。

これらペット由来の外来種問題の根源には、ペットとして飼いはじめたら最後まで飼いつけるという原則を守らない飼い主があまりにも多すぎることがあります。安易な遺棄や放獣が取り返しのつかないことになることを、肝に銘じて欲しいと思います。

## 静岡県の外来種

### ホテイアオイ

杉野孝雄



ホテイアオイの花

金魚鉢に浮かぶホテイアオイは涼を呼ぶ水草として、栽培した人も多いのではなかろうか。ホテイアオイはミズアオイ科の多年草で、6~11月に葉の間から花茎を出し、その先に美しい薄紫色の花を穂状に着けるので、ウォーターヒヤシンスの英名がある。和名の布袋葵は、水面に浮かぶように葉柄の中央が浮き袋のように膨らんでいて、その様子が七福神の一人、布袋の腹に似ていることから名付けられている。

葉は口ゼット状につく。根は水中に長く伸び、それに大量の根毛があり、水上部とのバランスを保っている。水深が浅く根が地上につくと地中に根を伸ばし、葉柄の膨みは小さくなり長くのび、草丈1mほどまで成長する。

原産地は南米で、日本には観賞用として明治中期に持ち込まれ、それが逸出して広まり野生化し、現在は、本州の東北地方から沖縄までの各地に分布している。静岡県には昭和初期に侵入していたことが知られている。

ところで、ホテイアオイは、栄養塩類が豊富にあると猛烈に繁殖し、池や水路を埋めつくす有害雑草である。河川では船などの運行を妨げ、水面を覆い尽くすことで、水流を停滞させ水質を悪化させる。群生するので他の水生植物の生存を妨げ、また、溶存酸素濃度を低下させるので、魚が酸欠で死亡することもあるなど、水生生物の生存にも影響を与える。さらに、枯死すると有機沈殿物となり、水質の劣化により、生態系を激変させ、生物多様性を失わせるなどその害は様々ある。



藤枝市内の池に密生するホテイアオイ

水温の高い地域ではその被害は甚大で、外国では、船の運航や水力発電を妨げる原因になるなどの被害がでている。フィリピンでは2011年にホテイアオイが大繁殖して、水路をふさぎ河川が増水、洪水被害が生じ70万人が罹災している。そこで、花は美しいが嫌われものにされ、ビューティフル・デビル（美しい悪魔）、駆除に莫大な費用がかかるので「100万ドルの雑草」と呼ばれ、栽培すると罰金が科せられる国もある。

日本でも各地で異常繁殖が知られていて、その防除に莫大な費用を費やしている県もある。例えば、2002年には徳島県では7000万円かけて除去作業を実施している。静岡県でも静岡市の麻機遊水地や三島市の中郷温水池では、大規模な駆除作戦が実施されている。

一方では、大量に得られることから、水質浄化やバイオマス原料として役立たせる研究も行われてきた。その場合は、増殖や枯死したホテイアオイを定期的に除去する必要があるため、その労力と経費が莫大になり実用化には至っていない。

ホテイアオイは、「世界の侵略的外来種ワースト100」にも指定されている有害雑草である。環境省も「要注意外来生物」に指定している。繁殖は種子と栄養繁殖で、主に株が分岐して増殖する。6株が4ヶ月ほどで、3891株に増殖した事例があるという。したがって、花は美しいが安易に株を水路や池に放したり、捨てたりすることのないようにしたい。

# 昆虫の宝庫 ニューギニアへの旅 杉本 武



コテージ前の熱帯雨林



ライトトラップ装置



集まってきた蛾

昨年友人から、ニューギニアに蝶の採集旅行の計画があるときいた。10日間の全日程のうちの6日間は山の上のコテージに宿泊してここをベースにして、日中は主として蝶の採集のため各ポイントに出かける。夜はコテージに灯火採集装置があって、蛾や甲虫を採集できるという。私は熱帯の昆虫の多様性、美しさ、奇抜さなどに強い興味があり、ニューギニアはまさに格好のフィールドと思って参加させてもらうことにした。

メンバーは自然史博ネット会員の諏訪哲夫氏、鈴木英文氏と私、そして北海道から佐藤國男氏、関西から松岡、藤田の両氏、そして引率として実に頼りになる坂巻和伸氏の計7人の旅である。私以外はみな蝶の採集が主な目的であり、私はあえて蝶以外のいろいろな昆虫を目的とした。

11月22日成田を出発、バリ島を経て23日にまずスラウエシ島（セレベス）マカツサルに入り、同地におむ標本商のジャスミン氏のはからいで近くの森林に入り採集にとりかかる。川のほとりにはトンボが多く、ハラビロトンボのなかまで腹部が鮮やかな赤色の種類や、紫色をおびたシオカラトンボのなかま、翅が美しい橙赤色のナンヨウベッコウトンボなど、どれもはじめて見るもので夢中になって採集する。ふと足元を見ると2センチ位の黒色のタマオシコガネ（俗にフンコロガシという）が牛の糞を玉にして転がして運んでいるのを見つけ1匹だけ採集した。カカオの林でセミが鳴いているので採集するとその腹面は美しいコバルト色だったのでおどろく。

11月24日にはよいよニューギニア島に渡り、西イリアンの西北端に近いアルファック山塊に入った。途中の川べりで採集をしながら標高1300mにあるメニ村に着いた。ここには標本商のテデイ氏が経営する立派なコテージがあり、ここに6日間宿泊することになる。敷地内にはトリバネアゲハの食草園と飼育場があって羽化した蝶を三角紙標本にして販売に回している。ライトトラップで採集した甲虫類なども商品となる。私たちはここをベースにして日中は車で山の上下各ポイントに採集に出かけ、夜は蛾や甲虫の灯火採集をする。私はあえて蝶は採らず、他のいろいろな虫を対象とした。昼間は主にトンボやハチの類、夜は蛾の採集に専念した。本当はコオロギなどの鳴く虫に興味があるのだが、それらは夜に鳴くため蛾の採集とは両立できないし、夜のジャングル内での単独行動は危険であり厳禁である。鳴く虫はスツパリとあきらめて蛾の採集に専念することにしたのである。コテージには実に立派なライトトラップの装置が備わっている。4mほどもある大きな白布が立っていて強力なライトがともる。点灯まもなく、無数の蛾が集まってきて白布に点々と止まる。蛾の鱗粉がほこりのように舞っていて、吸い込むとのがおかしくなるほどである。白布に止まった蛾を選びながら次々と殺虫管に収めて、ノックダウンしたものを三角紙につ



アケビコノハの一種



標本の一部



カワトンボの一種



ハラビロトンボの一種

つんで保管する作業がつづく。これを7時から11時までおこなうと、さすがに足腰がつかれるがなんとか5日間つづけることができた。集まってくる蛾は種類が多いうえにその色彩、模様、形が非常に多様性に富み、ほとんど初めて見るものばかりで実に楽しい。こんなに多くの熱帯性の蛾に囲まれるのも久しぶりで、私が1967年に静岡大学の南米コロンビアでの調査隊に参加した時以来45年ぶりのことである。スズメガ、ヤマユガ、ヤガ、ヒトリガ、シャクガ、メイガ、そして巨大なオオツバメガなどが次々にやってくるが、中に日本との共通種もほんの少しあり。フクラスズメ、シタバニコノハ、ナカジロシタバ、キクキンウバ、クロメンガタスズメ、エビガラスズメなどである。楽しかったのは大形のアケビコノハのなかまが何種類も採れたことで、中でも巨大で美しいベニモンコノハの一種はうれしかった。

蛾と共にカミキリムシやコガネムシなどの甲虫、セミ、カマキリモドキなどが飛来する。緑色のごく小さなセミと大形の2種類のセミが多く集まる。これは夕方決まった時間に鳴きだすセミである。熱帯では暗やみで活動しているセミもあるのだろうか。セミといえば白布のまわりにいつも数匹の犬がやって来てセミやスズメガを見つけるとつかまえて食べてしまう。犬はみなやせこけていて、ろくにエサをもらっていないようである。蛾は深夜まで次々に来るが11時には打切って部屋にもどり採集品の整理をすませ、シャワーを浴び眠りに就く。

今回の旅で、昆虫の擬態について興味深いことがあった。同室の鈴木氏が外に変な生きものが歩いているというので見ると、ゆっくりした動きで歩くクモのような昆虫のような生物である。形から見て徘徊性のクモの一種かなと思ったが捕まえてみてびっくり、ゾウムシであった。クモに擬態しているとされるクモゾウムシの一種とわかった。6本の脚のへりには細毛が密生していてクモの脚にそっくりである。翅端の尖りぐあいもクモの腹部そっくりである。2人でつくづく感心したものである。それにしても鳥の好物であるクモに似せて何の利益があるのだろうか。何か意味があるのだろうか、擬態の謎である。やはり熱帯はおもしろい所である。

今回採集した大量の蛾の標本は貴重な資料である。これから展翅と整理が終わったらすべて自然博ネットに寄贈したいと考えている。

駿河湾の深海魚 (5)  
 ススキハダカ (その2)  
 久保田 正・佐藤 武

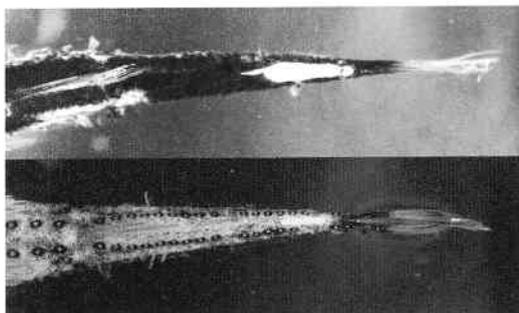


図1 ススキハダカの尾柄発光腺  
 上：雄 体長 57.0mm 駿河湾産  
 下：雌 体長 68.5mm 駿河湾産

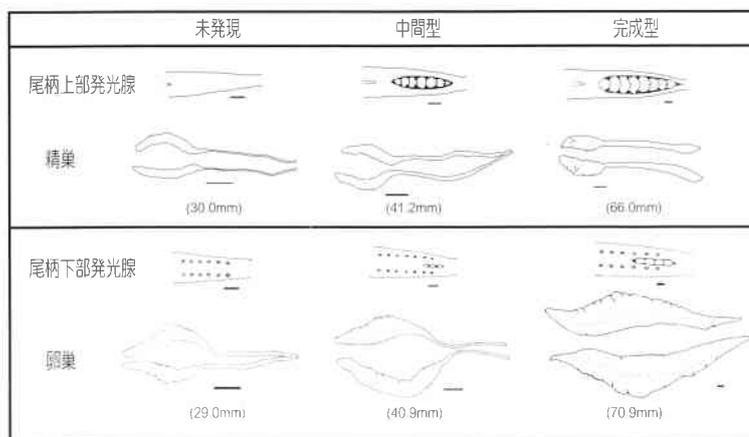


図2 尾柄上部発光腺と精巢 (上) および尾柄下部発光腺と卵巢 (下) の発達過程。各々の図スケールは 1mm、( ) 内の数字は体長を示す。

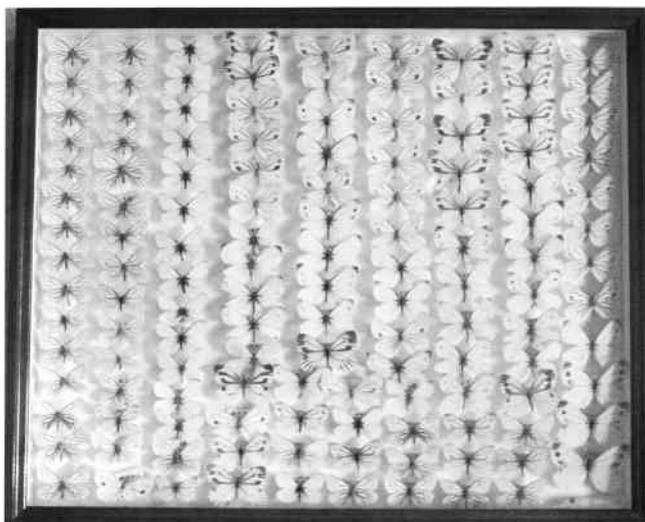
ススキハダカは、動物プランクトンの主にカイアシ類、オキアミ類、端脚類、貝虫類などの甲殻類プランクトンを餌としています。優先するカイアシ類はどの季節や海域でも *Calanus*, *Euchaeta*, *Pleuromamma*, *Labidocera* さらに小型のカイアシ類やその幼生などです。体長が小さい個体では、餌の種類数が少なく小型のプランクトンが多く、大きくなるに従って徐々に種類数も増加し、大型のプランクトンを捕食するようになります。この傾向は、甲殻類プランクトンを捕食する多くのハダカイワシ類にみられる大きな特徴ですが、例外の仲間がいます。それはブタハダカ属に含まれる日本近海産では3種 (ブタハダカ、アンドレハダカ、サキボソハダカ) です。これらの種は、個体によって小型のカイアシ類やオキアミ類を少しは食べていますが、大きさに関係なく大部分は浮遊性軟体類の翼足類と異足類を餌としていることが大きな特徴です。このことは、季節や海域が異なっても同じ傾向です。これらの食性の違いは、鰓耙 (さいは) の構造の違いによるものです。ブタハダカ属の3種の鰓耙は、未発達で短い棘が数本の塊になっている鰓齒 (さいし) に変化しています。一方、ススキハダカなどの多くの種類では、鰓耙は長く数も多く良く発達しています。このように鰓耙の構造によって飼料生物の組成に大きな違いが見られます。

また、本種の尾柄部の上部と下部にはそれぞれ発光腺があります。これは体側にある発光器とは構造が違って海面上昇群の種類に共通してみられます。この形状や細片 (パッチ) 数は、種類によって違いますが、同種内ではほぼ一定です。尾柄の上部にあるのが雄、下部にあるのが雌です (図1)。この発光腺は二次性徴であり、ある大きさに達すると現れて (発現し)、次第に完成します。また、それと同時に生殖腺も並行して発達します。これらの尾柄発光腺が見られない未成体の個体では雌雄の判別は腹部を開いて生殖腺を確認しないと判りません。

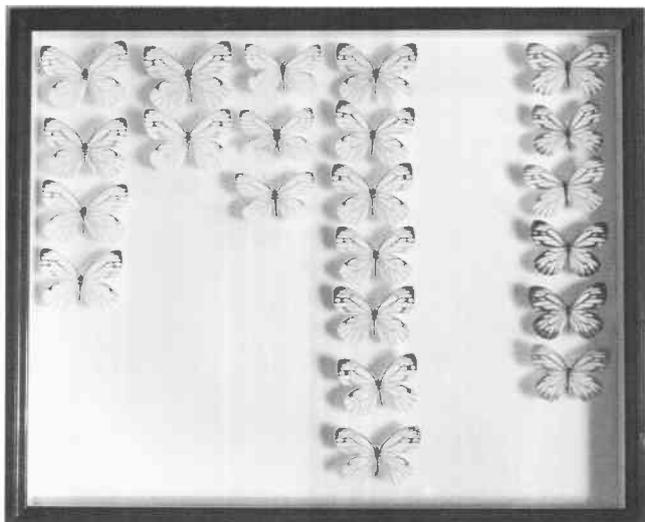
本種の雄の尾柄上部発光腺の完成後の細片数は6~8個です。菱形の細片は、乳白色で重なり合って一列に並んでいます。体長約29mmで現れ、体長約63mmで完成します。一方、雌の尾柄下部発光腺の細片数は、3~4個で、雄よりも少なく乳白色の小型楕円形のもので、癒着状に並んでいます。体長約35mmで現れ、体長約65mmで完成します (図2)。この図では、発光腺の発達過程を3段階に分け、それと同時に生殖腺 (雄は精巢、雌は卵巢) も対比させて示しています。

## コレクション紹介 北條篤史氏昆虫コレクション

諏訪哲夫



本州産のヤマトスジグロチョウと  
北海道産のエソスジグロチョウ



*Pieris* 属最大のオオスジグロチョウ

昨年11月、これまで寄贈された蝶類標本約800頭に加えて、ドイツ型標本箱80箱およそ5000頭の蝶類の寄贈がされた。氏が中学生の1953年に蝶の採集を始めて今年で60年近くになり、この間に採集した標本である。

1955年は静岡県には殆どいなかった南の蝶のクロコノマチョウが大発生した年であるが、生息地として好適な照葉樹の茂る神社・寺をくまなく調査し、発生の状況を明らかにした時の標本が多数含まれる。40年来氏はモンシロチョウの仲間（*Pieris* 属）に関心を持っている。日本にはモンシロチョウをはじめとしてスジグロシロチョウなど5から6種が生息しているが、一部を除いてそれぞれ種の区別が難しい。北海道のいわゆるエソスジグロシロチョウと本州のエゾといわれていたもの（現在ではヤマトスジグロシロチョウとされている）と異なる種でよいのか、さらにロシア沿海州のものとはどのような関係があるのか、いまだに確立していないところもある。さらにシベリア、中央アジア、ヨーロッパにかけておよそ20種が分布しているが、それぞれがお互いによく似ていて、その分類は論議を呼んでいる。幼虫の

食草も種によって限定的な場合もあって生態的にも関心を引く種群である。種の分類が難しいことや地域によって微妙に斑紋などが異なることから、多くの地域で多くの個体を標本にして色彩斑紋、鱗粉、生殖器の構造などさまざまな角度からの調査が必要である。このため氏は、日本では北海道から沖縄、対馬までをくまなく歩いた。さらにロシアの沿海州、シベリア、コーカサスをはじめ、中国、モンゴル、キルギス、トルコ、スペインなどにモンシロチョウの仲間を求めて世界各地に出かけて資料を集めた。研究のため大勢の同好者から寄贈された標本も多い。インドシナ半島北部から中国奥地にかけてオオスジグロシロチョウ（*Pieris extensa*）というモンシロチョウの3倍もあろうかという大きな種が分布している。この蝶の生息環境を自分の目で確かめようと2ヶ月間マラリアの恐怖と戦いながらミャンマーの中国国境で採集した。そのときの成果も寄贈されている。収蔵された *Pieris* 属の標本は1000頭をはるかに超え、国内のコレクションでは質量とも屈指の資料である。今後、これらの標本はこの種群の分類に無くてはならない貴重な資料となることは確実である。

## 出前博物館報告

三宅 隆

出前博物館は、当 NPO から出張して色々な体験学習を指導しながら進める博物館資料活用事業です。

### 吉田町ちいさな理科館

吉田町で経営する町立図書館に併設する施設ですが、展示室や実習室などもあり、小規模ながら、明るく綺麗で、魅力のある施設です。

12月11日に「化石の発掘を体験しよう」というタイトルで実施しました。はじめ10名の募集だったのですが、応募者が多く、最終的には20名ほどの子供達が、掛川層群の貝化石の発掘体験をしました。

はじめに、横山学芸員が概略を説明し、その後、各自歯ブラシを使って化石を取り出します。皆夢中で時間のたつのも忘れて作業に取り組んでいました。発掘した化石は、名前を調べてお土産に持ち帰ってもらいましたが、とても喜んでいました。この理科館では毎月イベントを組んで実施していますが、来年度も本事業の実施を頼まれました。



ちいさな理科館 熱心に説明を聞く子供達



ちいさな理科館 熱心に説明を聞く子供達

### 浜松科学館

浜松市の浜松科学館で12月17日、18日の2日間「第16回おや！なぜ？横丁～サイエンスアベニュー～」に参加しました。ここでは38ものタイトルのブースが出展し、子供たちが色々な体験が楽しめます。当 NPO は「貝化石発掘体験」のブースを出し、掛川の貝化石発掘の体験をしてもらいました。

ブースが狭いため、1日に1回4名で10回実施しましたが、予約を受け付けると、あっという間に一杯になり、受講できずに残念がる子供たちも多くいました。浜松科学館では、化石発掘体験学習は初めてのことで、好評でした。その後、科学館から感謝状が贈られてきました。



化石の説明を聞く子供たち



化石発掘体験を楽しむ

樹空の森 「富士山の生き物 標本・パネル展」

高山 達子



「富士山 樹空の森」



「富士山の生き物 標本・パネル展」

2月4日～26日、御殿場市にある樹空の森ギャラリーにて「富士山の生き物 標本・パネル展～富士山の生態系のいま・むかし～」の展示を行いました。この施設は御殿場市印野にあり、正式には「御殿場市富士山交流センター」ですが、親しみやすいように「富士山 樹空の森」と呼ばれています。「富士山情報発信」、「自衛隊との交流」、「地域活性」の役割を担う御殿場市の公園施設で「天空シアター」という大きな立体スクリーンで富士山の四季の変化などを紹介しています。また1階には地元の特産品の他に、自衛隊グッズが売られていたり、なかなか面白い施設です。

展示期間中の2月23日は静岡県が定めた「富士山の日」。この日、展示に合わせて解説に行ってきました。といってもこの日の天気は雨。間近に見えるはずの富士山も雲の中でした。「お客さん来てくれるかしら？」と不安に思いながら樹空の森に到着。平日ということもあり、それほど多くは無いですが、ぼつりぼつりと途切れずに見学に来てくれる人がいました。

会場に入ると、まずはニホンジカの角つきの頭骨標本が眼に入ります。天井の高い、開放的なスペースにスポットライトで照らされた展示がとても綺麗に見えます。

つぎに富士山の植物のパネル。そして昆虫、両生・爬虫類、鳥類、哺乳類のパネルがあり、最後にNPOの活動のパネルがあります。富士山由来の名前がついた植物や、ウスバシロチョ



2月23日の富士山の日の会場

ウの分布拡大などに、興味を持たれて、お話をされている方、鳥の写真を感心してご覧になる方など、それぞれ思い思いのところで、楽しんでいただいているようでした。

会場の中央には、標本箱が並んでいます。色々な哺乳類の頭骨と動物の落し物（糞、食べ痕など）、モグラ・コウモリ・ネズミ等の剥製。両生・爬虫類、魚類のアクリル標本とフィギュア。昆虫のところには、絶滅が危ぶまれる蝶や絶滅してしまった蝶なども並べられていて、富士山周辺も随分変わってしまったと悲しんでいる方もいました。子供たちは剥製に興味津々、フィギュアの展示に大喜びでした。

短い時間でしたが、実際に見学して下さる方たちとお話をし、喜んでいただいているのを見て、博物館の必要性をさらに感じた一日でした。